

Dr. 板東のメディカルリサーチ No. 190

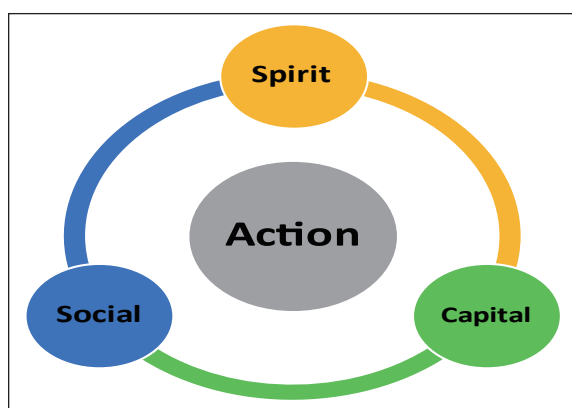
<ICT リテラシーを 目指す今>

いま大河ドラマ「青天を衝け」が放映されている。主人公は新一万円札の肖像にも使われ、日本の資本主義の父と評される「渋沢栄一」氏。江戸から明治時代に移行する混沌とした時代に、激動の人生を送った。彼は武士の魂を有し、パリ万国博覧会の使節団に任命され世界の動向を知る。少額でも人々のお金が広く集まれば、水道や鉄道など社会基盤が作られ国が発展する。これが「Capital-Social (キャピタル-ソーシャル、資本と社会)」と学び、「士魂商才を貫いた先駆者」と評価された。彼の生涯と現在日本の社会状況をあわせて考え、言語や言葉、思考、行動に関して感じることを若干記したい。



◆スピリット ソーシャル・キャピタル アクションへ

渋沢栄一氏の業績を分析してみた。①日本古来の優れた武士道精神 (Spirit)、②経済的な資本を上手に活用 (Capital)、③社会の変革を推測 (Social)、④以上の実践 (Action) で人々も国も幸せに。大志を抱き、若い頃から稀有な経験を積み重ねた原動力とは？ 自身が「いまここに存在」し、「念」(今の心)の力が心に強く語り掛ける。その言葉とは、日本人なら日本語、外国人なら外国語で考えるものとなる。



◆いま懸念 するのは文化 軽薄に

ソーシャルキャピタル (社会的資本) ②③は確かに必須で重要だが、根本となる精神①が未成熟の場合が問題となる。ときにインターネット上の議論で炎上が見られることをご存じであろう。これには、内容が非常識な場合、一つの単語や言葉尻に批判が集中する場合などがみられるようだ。

近年、我が国の社会情勢として、人と人とのコミュニケーションは軽快で楽しい状況が求められる。真面目で重たい話題は避けられやすい。おおむね若い世代は、表面的で軽薄文化が主流かもしれない。推測するに、各自がじっくり日本語を読み込んだことがないため、表面的な単語だけで一喜一憂し、隠された文脈 (コンテキスト、context) には気が付かず、考えず、推測できていないようだ。そのため、途中経過の状況を全く考慮せず、結果や結論だけを簡単に示せ、というような無理な要求が来ることも。そもそも、あらゆる物事には答えはない。○か×か、二者択一で簡単に結論が出るわけがない。

最近、報道番組でも「この文脈によると…」と使われつつある。しかし、意図や思考、意見が円滑に伝わるのは難しい。思考とは、落ち着いて思い考え、まとめられれば意見となる。今後、いろいろな問題に対して冷静に考え、深い意味を理解してほしいと願う。これは、近年「リテラシー (literacy)」と呼ばれてきた。関連する英単語として、文字や手紙は letter、文学は literature という単語がある。

リテラシーとは、識字、知識や理解、知識や情報を有効活用できる能力などを意味する。あらゆる場合に、どのような意味や状況、背景が含まれているのかを、じっくりと考え、短絡的に判断しないようにしたいものである。なお、参考として、いま「ICTリテラシー」が発信されている。「ICT (情報通信技術) を正しく適切に利用、活用できる力」のことを意味しており、教育改革において小学生から行っている (表)。言葉によって人は考えることができ、精神や人格、生活習慣が形づけられていく。

- ★ ICTリテラシーとは
- ①機器類を使いこなせる
 - ②正しい情報を探せられる
 - ③情報セキュリティや知識が備わっている

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト)